



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評 : 大田俊寛著,「オウム真理教の精神史 : ロマン主義・全体主義・原理主義」, 春秋社, 2011年刊行
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	週刊読書人, 2011/07/08, 4
Issue Date	2011-07-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47963
Type	journal article
File Information	shukandokusho_aum.pdf



櫻井義秀

著者によれば、「オウムとは、ロマン主義的で全体主義的で原理主義的なカルトである。」

この仮説を 2010 年度の日本宗教学会学術大会で聴講したとき、評者は当惑した。この十数年に積み上げられた汗牛充棟のオウム論をばっさり切り捨てる大胆さと、あまりにもストレートな結論。

オウムを「終末論的カルト」と定義したのは、アメリカのカルト研究者マーガレット・シンガーだった。1995 年 3 月 24 日の配信記事以降、日本はオウムを新宗教とは別の「カルト」と認識するようになる。だから、今さらカルトと言われても驚くことはない。著者のねらいは、ロマン主義、全体主義、原理主義といった近代宗教の特徴をオウム真理教が持つことの意味を宗教学的に再考することにある。

著者が定義する宗教とは、生死を超えて存続する「虚構の人格」を社会統合の象徴とし、人と人のつながりにコスモロジカルな意味と価値を付与した秩序である。このような原始宗教は歴史宗教として祭祀階層や王権を生み出してきたが、世俗化によって主権国家から宗教的正統性が剥ぎ取られ、国民として人々が主体化されるに至って、個人のアイデンティティ・クライシスや社会秩序における道徳的価値の混乱が近代の解決すべき問題となった。

啓蒙主義的理性では捉えきれない自己や世界を探し求めたのがロマン主義であり、宗教心理学、神智学、ニューエイジ（精神世界）に至る精神的系譜にオウムは連なる。

大衆社会における精神の卑俗化に辟易した人間は、ニヒリズムを克服して精神的卓越性を求める。社会全体の精神的改造計画をもくろむナチズムの系譜上にヤマギシ会やオウムのユートピアがある。

近現代社会の資本主義やテクノロジーに幻滅した人々は、ハルマゲドンによって世界の終末、価値の転換を叫ぶことになり、終末論的世界観がカルトに共有されるに至った。

著者はこのような近代宗教論を展開した上で、「死」を扱う虚構の人格を失った後期資本主義社会において、人格とつながりの磁場を提供するカルトに若者が入信したという。

本書では全体の三分の二の紙幅が近代宗教論に費やされ、残り三分の一が「オウム真理教の軌跡」として教団の成長と破綻の顛末を述べることにあてられている。

以下、評価に移る。著者の近代宗教論は筆力もあり、読ませるものだ。オウム事件のまとめは要領を得ており、麻原のシャクティパットは催眠術といった指摘も随所に織り込んでいる。しかしながら、オウムとは何であったのかという問いに対して、近代宗教の鬼子であったという結論には物足りなさが残る。

「オウム真理教の精神史」という問題設定がなされるが、どうだろうか。オウムの教説や修行にはチベット仏教とニューエイジ、終末論や陰謀論、日本の新宗教的要素が、教祖

の恣意や教団の状況に合わせて寄せ木細工のように組み上げられている。麻原や高弟達が、著者が取り上げた思想家・宗教者のような意味で精神史に連なり、エスプリを継承したのかどうか。また、サリン事件をはじめとする一般市民・信者を多数殺傷した事件と宗教的精神との間に関係があるのかどうか。おそらく著者が気づいているように何も無い。

もっと言えば、精神の欠如と宗教人としての自覚や経験のなさこそ、このような教団犯罪を生み出したのではないか。宗教学だからこそ、宗教によって説明できるものと説明できないものを分別してほしいと感じた。

ヨーロッパの精神史をグノーシス主義から近代まで幅広く研究している若手研究者が、オウムを通して考え抜いた現代宗教論として本書は読まれるべきものだ。オウム真理教という教団、カルトや原理主義の実証研究としては、二次資料（教団刊行物や評論）に依拠している本書は弱い。しかし、果敢に現代宗教の暴力という問題に正面から取り組んだ著者の心意気と才気を感じる文章には賛辞を惜しまない。